

異世界の地下水路で水番として転生した元保育士の Ω が水路の番人 α に「お前のヒートの匂いが水路中に流れてる、もう隠せないぞ」と暗渠の奥でカントを開かれ番にされる話

「っ……嘘……」

シーツを握りしめる。身体の芯が脈打つように疼いている。下腹の奥——カントが、じゅくじゅくと湿った音を立てて震えていた。

抑制剤が、切れた。

昨夜飲んだのが最後の一包だった。月白草の在庫はもうない。次の入荷は一ヶ月先。わかっていたのに、こんなに急に来るとは思わなかった。

(まずい……このまま部屋にいたら、匂いが廊下まで……)

重い身体を引きずって、水番の制服に袖を通す。水路に降りれば匂いは水に紛れる——そう信じて、地下3層への階段を降りていった。

水門のハンドルに手をかけた瞬間、指先から全身にぞくりと感覚が走った。鉄と苔と水の匂い。その下に混じる、あの——深い雄の残り香。

堰守玄の巡回ルート。この通路を、数時間前に歩いている。

カントがきゅう、と疼いた。

「やだ……っ」

太腿を擦り合わせる。ハンドルを回す手が震える。水量の数値を読み取るだけの単純作業なのに、指が滑って数字を追えない。

足首まで浸した水路の水が冷たいのに、身体の奥だけが灼けるように熱い。

ずっと隠してきた。5年間。

前世で保育士をしていた28年間も、カントを持つこの身体を恥じ続けた。男なのに女性器がある。Ωの、カントボーイ。抑制剤で蓋をして、恋もせず、自分の身体に触れることすら避けて生きてきた。

異世界に転生しても同じだった。βの水番として身分を偽り、地下水路という人目のつかない職場を選び、自作の抑制剤でヒートを封じ込めて——

水門の点検を終えて通路を歩く。壁に手をついて身体を支えた。石壁の苔が指先にひやりと張りつく。

——足音が聞こえた。

重い。規則正しい。地下4層の方角から、近づいてくる。

心臓が跳ねた。この足音を、身体が覚えている。

暗がりの奥から、堰守玄が姿を現した。190cmを超える長身が、低い天井の通路を圧迫するように歩いてくる。黒髪を無造作に流し、翡翠色の瞳が薄闇の中で光っている。

「水鏡。水門の点検報告が上がっていない」

低い声が水路に反響する。事務的な口調。なのに鼓膜を震わせるその低音が、身体の奥までじんと響く。

「す、すみません……今日中に提出します」

距離を取ろうとする。だが通路は狭い。すれ違うには身体を寄せなければならない。

「顔色が悪いな」

玄の手が伸びてきた。凧の額に触れる。

「っ——」

指先が触れたただけだ。額に手を当てられたただけだ。なのに全身が電撃のように反応した。カントがびくりと痙攣し、下着の中でぐちゅ、と蜜が染みる。

(やだ……今、音した……っ?)

慌てて身を引く。玄の翡翠色の目が凧を見つめている。一瞬——ほんの一瞬、その瞳の奥が揺れた。

「……体調管理を怠るな。報告は明日でいい」

それだけ言って、玄は通路を歩き去る。

凧は壁に背中を押しつけて、崩れ落ちそうな膝を支えた。

(この人の近くにいと……身体が、おかしくなる……)

玄が歩いた通路の空気には、まだ α フェロモンが漂っている。苔と鉄と、その奥にある濃密な雄の匂い。肺の奥まで吸い込んでしまった。カントがひくひくと疼いて、蜜がとめどなく染み出してくる。

こんなのは——5年間で、初めてだった。

その夜、宿舎のベッドで眠れなかった。

仰向けに寝転んだまま、天井を睨む。シーツの下で太腿を擦り合わせると、濡れた下着がぬちゃりと嫌な音を立てた。

(止まらない……朝からずっと……)

カントが疼いている。空っぽなのに何かを求めて、じくじくと熱を持っている。前世でもなかった反応だ。

指を伸ばしかけて——止める。触ったらもっとひどくなる。このカントを自分の手で慰めるなんて、認められない。男なのに。男の身体をしているのに、ここだけが女で、しかもΩで——

「……っ、くそ……」

寝返りを打つ。シーツに押しつけた下腹が、じんわりと甘く痺れた。

翌朝から、凧は玄との接触を徹底的に避けた。

巡回の時間帯をずらす。報告は書面で置いておく。食堂でも離れた席を選ぶ。

それでも——玄の匂いは水路に残っていた。通路の空気に。石壁に染みたフェロモンに。凧の鼻はそれを逃さない。水の匂いを嗅ぎ分ける水番の鼻が、αの匂いにも過敏に反応する。

通路を歩くたびにカントが濡れた。水門のハンドルを回すたびに腰が震えた。

3日目の朝。目覚めたとき、枕が濡れていた。涙ではない。汗だ。全身が発熱したように汗ばんでいる。

下着はもう意味をなしていなかった。カントから溢れた蜜が太腿を伝い、シーツに染みを広げている。甘い匂いが部屋に充満していた。

ヒートが、来た。

(逃げなきゃ……この部屋にいたら……匂いが)

這うようにして部屋を出る。廊下に人がいないことを確認して、地下への階段を降りていく。水路の水で身体を冷やせば——少しは——

地下3層の水路にたどり着いたとき、膝が折れた。浅い水の中に座り込む。冷たい水が腰まで浸る。

「はっ……は……っ♡」

冷たいのに、熱い。水に触れた瞬間、カントが反応して蜜が溢れた。ヒートのフェロモンが水に溶け出していく。甘い、甘い、Ωの発情の匂い——

水路の水が、それを運んでいく。上流から下流へ。地下3層から4層へ。4層から、その先の暗渠へ。

風はそれに気づかなかった。自分の身体を抱きしめるのに精一杯で。

「いやだ……こんなの……っ♡ 男なのに……こんな……っ」

カントが脈打っている。空っぽが苦しい。何かで埋めてほしいと、身体が叫んでいる。

——足音が聞こえた。

重い。規則正しい。地下4層の方角から。

凧は目を見開いた。

暗がりの奥から、堰守玄が歩いてくる。松明も持たずに。暗闇の中で翡翠色の目だけが光っている。

「——やっぱりここか」

低い声が水路に反響した。呼吸が深い。凧のフェロモンを、肺の奥まで吸い込んでいる。

「お前のヒートの匂いが水路中に流れてる、凧。もう隠せないぞ」

「っ……」

逃げようとする。脚に力が入らない。水の中で膝が滑る。

玄が近づいてくる。一步。水を踏む音。もう一步。

「5年、よく隠したな」

「来ないで……っ♡」

「だが俺には最初から分かっていた。赴任初日から——お前の匂いに」

心臓が止まりそうだった。

「嘘……っ」

「嘘じゃない。βにしては甘すぎる匂いだった。お前が自作の抑制剤で身体を騙していたことも、月白草の残量が減っていたことも——全部知っていた」

凧の目から、ぼろりと涙が落ちた。

「なんで……言わなかったんですか……」

「言ったらお前が逃げるだろう」

玄が凧の前にしゃがむ。水路の浅い水の中で。二人の距離が消える。

大きな手が凧の顎を掴んだ。顔を上げさせる。翡翠色の目が至近距離にある。

「逃がさないために——黙っていた」

ぞく、と背筋が震えた。恐怖ではない。αフェロモンが至近距離から注がれている。水路の湿った空気が重く変わる。雄の匂い。深く、濃密で、逃げ場のない——

カントが反応した。ぐちゅり、と音を立てて蜜を溢れさせる。水路の水に混じって流れていく。

「ひっ……♡♡ やだ……聞こえ……っ♡」

「聞こえてる」

玄の親指が、凧の下唇をなぞった。

「水が全部教えてくれる。お前のカントが、どれだけ濡れているか」

その瞬間——上層から水門の警報音が鳴り響いた。

水量異常の合図。甲高い音が水路に反響し、二人の間の空気を裂く。

玄の手が止まる。舌打ち。

「……行くぞ。話は後だ」

風の腕を掴んで引き起こす。水路の水が跳ねた。

結局、水門の誤作動で大事には至らなかった。

修理を終え、報告書を書いている間も、風の手は一度も震えを止めなかった。

バレた。

いや——ずっと前から、知られていた。

宿舎に戻っても眠れない。ヒートの熱が全身を焼いている。下着を替えても、すぐに蜜で濡れる。シーツを噛んで声を殺した。

逃げることを考えた。この水路を離れて、別の街で——だが身寄りもなく、ヒート中のΩが一人で旅をすれば、もっと危険な目に遭う。

(どこにも……逃げ場がない……)

カントがきゅうきゅうと締まる。空っぽが辛い。堰守玄の指が触れた顎の感触が消えない。あの翡翠色の目が、瞼の裏に焼きついている。

——赴任初日から、知っていたと言った。

2年間。ずっと黙って。

風はシーツを握りしめた。怖い。でも身体は——カントは、あの匂いを求めて疼き続けている。

翌日。地下4層の水門に亀裂が見つかり、緊急修繕の指示が出た。

担当は凧と——堰守玄。

「無理です。他の人を——」

「人手が足りない。行くぞ」

断る隙もなかった。玄は凧の返事を待たずに地下への階段を降りていく。

地下4層は薄暗い。松明の光が石壁の苔を照らし、水路の水面にゆらゆらと反射している。二人の足音と水音だけが反響する。空気は重く湿り、匂いが逃げない。

修繕作業中、玄が工具を差し出した。受け取ろうとして——指が触れた。

「っ——♡」

凧の手が跳ねる。カントから蜜がじわりと滲んだ。

玄は何も言わない。ただ作業を続ける。だが視線が——時折、凧の首筋に向けられている。

作業が一段落した。狭い通路に並んで座る。肩が触れそうな距離。

玄が水筒の水を飲み、凧に差し出した。

「飲め」

短い命令。凧は受け取るが、玄の唇が触れた飲み口を見つめて固まる。

「どうした。喉が渴いてるだろう」

仕方なく口をつけた。水と一緒に、かすかな α フェロモンの残り香が喉を通っていく。

カントがきゅん♡と締まる。蜜が、じわりと下着に染みた。
「っ……♡♡」

慌てて太腿を閉じる。でも湿った空気が匂いを運ぶ。甘い匂いが——

「凪」

名前で呼ばれた。いつもは「水鏡」なのに。

顔を上げると、翡翠色の目が至近距離にある。

「最近、水路の匂いが変わった。気づいているか」

心臓が喉元まで跳ね上がる。

「な……何の、ことですか」

「甘い匂いが混じるようになった。地下3層から4層にかけて。お前の担当区域と完全に一致する」

顔から血の気が引いた。

玄の手が伸びてくる。凪の首筋に——触れようとして。

「せ、堰守さんっ——」

凪が立ち上がった。膝が震えている。

「点検……まだ残ってます。行かないと」

逃げた。通路を早足で歩く。背中に玄の視線を感じながら。

角を曲がったところで壁に背中を預け、ずるりと座り込んだ。

「はっ……はっ……っ♡♡」

息が荒い。心臓がうるさい。下着がぐっしょり濡れている。
(バレてる……もう、完全に……っ)

でもまだ——まだ決定的なことは言われていない。カントのことは。Ωだとは、直接は——

「——お前が何を隠しよう」と

背後から声がした。

振り返ると、玄が角の向こうに立っていた。壁に片腕をついて、風を見下ろしている。

「俺は2年間、お前の匂いが溶けた水を浴びてきた」

風の目が見開かれる。

「暗渠の最深部で。お前の匂いが流れてくる水を掬って、口に含んだこともある」

「……っ、なに……それ……」

「狂ってるだろう。自分でも分かってる」

玄が一步近づく。風は壁に背中を押しつけたまま逃げられない。

「だがもう限界だ。お前の抑制剤が切れて——ヒートのフェロモンが水路全部に流れた。今朝、暗渠で匂いを嗅いだ瞬間、理性が半分飛んだ」

「こ、来ないで……っ♡♡」

「来るなと言うなら——先にその匂いを止めろ」